

---

# 恋愛事情～梓の場合～

笠原綾乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛事情～梓の場合～

### 【NZコード】

N5271A

### 【作者名】

笠原綾乃

### 【あらすじ】

もう、恋愛なんてしない そう決意していた梓が出会った一人の転校生、秀樹。少し強引な彼に惹かれていく梓だったが……。

## 1・出発（前書き）

やや現実離れしたお話かもしませんが、『意見・』感想お待ちしています。

男の人なんて、みんな同じ。

女の子のことを、自分の都會のいじょうにしか思ってない。

そう、考えていたのだけれど……。

「「」みんなさー」

高校に入学してから一年半。何度、このセリフを言つたかわから  
ない。

私の目の前にいる背の高い男の子が、ため息をついて私を見下ろ  
す。

「どうしても、ダメなのかな?」

私は彼の目を見ずにうなずいた。

「……そつか。わかった

真っ赤な夕焼けの下、踵を返して歩いていく彼の様子をただ、見  
送る」

としかできない。

だつて、好きでもない人とつきあうなんて、いや、男の人とつきあうな  
んて、もう金輪際、ごめんだから。

「ちょっと梓、また振ったんだつて？」

翌朝、2年B組と書かれた教室のドアをくぐり、隅の席に座った  
私に、シ  
ヨートカットのよく似合つ、目の大きな私の親友、大山佐知子がや  
つてきた。

「また、つて何よ」

「だつてそうじやないの。西川君を振るなんて」

佐知子はそう言つと、持つていたパックの野菜ジュースをストロー  
ーで飲  
み干した。

昨日私が振つたのは、生徒会副会長でサッカー部主将の、西川正  
志君。

かつこよくて優しい彼は、女の子の人気者。

確か、先週行われた学校祭の人気投票で第3位に入つていたはず

だ。

「しょうがないじゃないの。私が好きになれないんだから」

「彼氏が欲しいとは思わないわけ？」

ワンレングスの少女、館岡香織がやつてきて、パンをちぎって口に入れた。

「別に、だいたい、男の人とつきあうのってそんなに楽しい？」

私の席を取り囲んだふたりが、大きくため息をついて顔を見合わせた。

「そりや、楽しいばかりじゃないけどさ」

今、つきあっている彼氏と喧嘩中の佐知子が、少々投げやりにしぶやく。

「でも、この人とずっと一緒にいたいな、って思える人の隣にいたら、それだけで幸せだと思わない？」

つい最近、恋を実らせたばかりの香織が、微笑みながら訊いてくる。

そりや私だつて、そんな人がいなかつたわけじゃない。

幼いながらも真剣に思つていた彼がいた。

でも彼は、私をいいだけ利用して、自分に都合の悪い女になった途端、私をあっさり捨てた。それ以来私は悟ったんだ。男はみんな、一緒にんだって。

「うひ、チャイムは鳴ってるぞ。席に着け」

担任の古賀先生のひとことで、数箇所に固まっていたグループがちりぢりになり、みんなおとなしく席に着く。

私の通っている高校はこの近くでは有名な進学校で、某有名大学合格率70%をはじきだしているけれど、校風はわりと自由。制服こそあれど、届けさえ出せば私服登校もOK。

そんなにうるさい校則もない。だからこそ、みんなはそんなに羽目を外すことなく、普通に学生生活を送っている。

私は西森梓は、そんな自由な校風への憧れと、中学時代まで住んでいた町を離れたい一心で、倍率15倍の難関を突破し、この清風高校に入学した。

「えへ、HRを始める前に、転校生を紹介する」

ずれた眼鏡を直しながら、古賀先生は言った。

ドアを開ける音がしたのち、転校生が姿を見せた。

すると教室のあちこちから、感嘆の声があがる。

確かに、いい男だ。目は決して大きくないけれど、整った顔立ち。

髪は少し長めだけど、ヘアワックスでまとめてあるせいか、不潔な感じはしない。

「三上秀樹です。よろしくお願ひします」

「三上の席は……。お、西森の横が空いてるな」

私の名前が先生から告げられたとき、女子のなかから安堵の声がもれた。

私なら、彼を好きになることはないと思われているのだろう。

実際、男の子とあまり関わりたくない私には、迷惑なんだけど。

「よろしく」

「ようこそ」

最初に交わした短い会話。このとき私は、彼のこと好きになってしまった。  
うなんて思いもよらなかつた。

## 1・出会い系（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。  
(月1回)

## 2・接近

1時間田の授業が終わった。

案の定、隣の彼の席を、クラスの女の子の大部分が取り囲んだ。

「ねえ、どうして今頃転校してきたの?  
「部活は何やってたの?」

といつた当たり前の質問から、

「彼女は?」「好きなタイプは?」

そんな下世話な質問こまで、三上君は丁寧に答えていた。

正直、つねに本が読めない私は立ち上がり、廊下へと出た。  
あの席、静かで気に入っているのに、じばらくはやかましい口が  
続こう。

「けつこい男じゃない?」彼

赤く色づき始めた木々の葉をぼんやりと見つめる私の背後から、  
佐知子  
が声をかけてくる。  
「やつかしら?」

「やつかしらと別れて、モーションかけりやおつかな

「何言つてゐるのよ。別れる気なんかないくせに」

私がそつ言つと、佐知子は口をすさませて黙つてしまつ。  
「だいたい、青山君が浮氣した証拠なんどこにあるのよ？ また佐知子の考え方過ぎじゃないの？」

佐知子の彼氏、青山淳君は陸上部短距離走の期待の星にして、学年成績は常に上位5本の指に入るほど優秀。もちろん先生方の信頼も厚い。ゆえに、もてる。

だから3ヶ月に一度は浮氣したしないで喧嘩をし、そのたびに『別れる』『別れない』を繰り返しているのだ。

「いいやー、今度こそは浮氣してゐるの。絶対に別れてやるんだから」

強く反論する佐知子の目に、涙が浮かんでいる。

（別れたいなら、たつと別れてしまえばいいの）

私はいつも思うのだけれど、佐知子は結局、彼の想いの強さに負けてしまう。

なんだかんだ言つても、佐知子も青山君のことが好きなのだ。

今の私にはまつたくない感情だ。実際問題、一度と持ちたくないけれど。

「とにかく、一度話し合ってみなせよ。ね

チャイムが鳴ったのを合図に、話を持ち切り、教室へと入った。

やつと放課後になつた。

結局あの後も、三上君に対する女の子たちの質問攻めで私の席の周りは占領されてしまい、休み時間の大半を廊下で過ごしていた。

(やつと座れる)

4階の真ん中にある図書館のドアを開けて、いつも座っている窓際の席に腰を下ろす。

少しずつ陽も短くなってきて、窓の外に見える山の向こうに夕焼けが落ちていく。それを背に本を読む」のときが、私の心が一番安らぐ瞬間だ。

今読んでいるのは、時代小説。

昔も今も、男と女の恋愛事情は変わらない。

『好き』と『嫌い』

この感情にはみな揺れ動き、一喜一憂する。

何度も失敗を繰り返しても、人はまた、恋をする。

……不思議な生き物だ。人間つて。

自分もかつては恋をしていたくせに、そんな生意気なことを考えている  
と、珍しく、図書館のドアが開いた。

「どこかで見たことのある顔が、きょのきょと中をのぞいている。  
そして私の姿を確認すると、わき田も振らずに歩いてきた。

「三上君」

「西森さん、だつたよね。ちょっと頼みたいことがあるんだけど」

「私に?」

三上君はうなずいて、いきなり手を合わせてきた。

「俺に、勉強教えてくれないかな」

「はあ?」

私は思わず声をあげた。数少ない利用者の目が、一斉に「ひりひり」を向く。

しかし彼は、そんなことはお構いなしに話し続ける。しかも大きな声で。

「ここ」の学校、前に俺がいたところよつ勉強進んでるんだ。今日一日授業受けたけど、ちんぶんかんぶんでや」

「だからって、どうして私なの?」

「どうして、って言われても……。駄目かな?」

「悪いけど、他の人あたつてくれない。私、勉強教えるの得意じゃないし」

「そこをなんとか! お願いします!」

彼がさらにも大きな声を出すものだから、他の人たちの非難の目が、私たちに集中する。

「のままだと、追い出されかねない。

「わかった。わかりましたよ。ただし、少しの間だけよ」

「ありがとう。恩に着るよ」

再度顔の前で手を合わせて拝んでくる彼の姿を、私は半ば呆れな

がら見つ  
めていた。

面倒なことに、ならなきやいにけどな……。

### 3・過去・初めての恋・

三上君に勉強を教えるよつになつてから、数日がたつた。

今のところ、クラスの人たちからの反応はなく、いたつて穏やかに、かつ順調に勉強は進んでいた。まあ、学校祭が終わり、来週から中間テストが始まるから、みんなそれどころではないのだろう。

「西森さん」

「何？ わからないうち？」

「いや、やうじやなくして」

私の机の前に座っている三上君が、持っているシャープペンをノートの上に置き、真剣な表情で見つめてきた。

「彼氏作らない主義、つて本当なのかい？」

「ああ、そのことか。」

「だれに聞いたの？」

「クラスでもうじやの評判だよ。西森さんとは男の子を振りまくるつてね」

確かに。クラス中のみならず、学校中の評判になリつつある。

「作りたくないだけよ」

私は手短に答えた。

「どうして？ そんなに可愛いのにもつたいない」

「……は？」

面と向かって言われた私は、思わず彼の顔を凝視した。

実は私、自分の容姿が好きじゃない。どちらかといつと細い目で、あまり高くはない鼻。今流行の化粧なんて全く似合わない顔立ちなのに。その私が、かわいい？

「冗談よしてよ」

「俺は冗談は嫌いなの」

三上君は表情を変えずに、さうりと黙つてのける。

「どういった理由で作りたくないかはわからないけど、もう少し、男に目を向けてみてもいいんじゃない？」

「大きなお世話。それより、問題解いたの？」

彼から田をそらし、ノートを指差した。

「はいはい。これでいいですか。先生」

差し出されたノートに田を通すが、内容があまり入ってこない。

時間が経つにつれ、顔が熱くなつていいくのがわかる。頬はきつと  
真っ赤  
になつてゐるに違いない。

でも、田の前の彼は氣づくとなく、次の問題に田を通し始めて  
いる。

私はそつと、顔色を隠してくれてゐるこつもの夕焼けに感謝した。

家に帰つて、ようやく自分の試験勉強を始めたが、全く身に入らない。  
つていうか、皆田されたわけでもないのに、なんでこんなに動搖しぬ  
なけれ  
ばならないんだろう。

「ばかばかしい」

私はひとり、小さくつぶやいた。

別に、三上君にかわいいと言われたからって、嬉しくもなんでもない。

でも、心のどこかで、そつとほくそえんでいる自分がいる。

ちょっと待て。

私はもう、恋なんてしないって決めたの。

男なんて、みんな一緒。

自分のためなら、好きでもない女だって、平氣で抱けるんだから。

そう。自分の立身出世のためなり……。

『私の生徒の飯島くんだ』

一年前。

まだ私が実家にいた頃、私は地元の進学校を志望校にしていたので、勉強を教えてくれる人を紹介して欲しい、と父に話していた。

父が連れてきたのは、生徒の中でもトップクラスの成績を誇つている飯島昇。そいつが、私の初めての「彼氏」。

『君のことが好きになつたんだ。つきあつてほしい』

そう言わされたのが、勉強を教えてもらひつよつになつて、三ヶ月目  
の秋。

あいつに対する「好き」という感情はなかつたけれど、男の人に  
告白さ  
れたのが初めてだつた私は、その言葉だけで有頂天になつた。

ほんどのなりゆきでつきあい始めたけれど、そうなつてしまえば  
もう、  
私は日に日に彼に夢中になつた。

背が高くて顔もまあまあ。物腰がやわらかく、常に私を気にかけてくれ  
る彼は、私にとつて完璧な彼氏。当然、初体験も言われるがまま早  
々に済  
ませた。

しかし、恋に夢中になるほど、学校の成績は下がるのが一般的。  
私ももちろん、その憂き目に会つた。

その頃から、彼の……いや、あいつの態度が徐々に変化してきて  
いたこ  
とに、私はまだ気づかずについた。

#### 4・過去・破綻・

もしあのとおり、もつと早く「黒夜」に気がついていたら、こんなに傷つか  
ずに済んだのだろうか？

『ただいまおかげになつた電話は、電波の届かない場所にあるか…』

机の上の明かりだけが光る、薄暗い部屋の中で耳にひびく機械音。  
これで何度も「うう…」。

（困ったな…。教えて欲しいこと、いっぱいあるのに…）

この前返つてきたテストの結果は、散々だった。

もう、受験までわずかしかない。なのに、今まで解けていた問題  
が、解  
けない。

勉強時間は変わつていない。いや、昇るひとつもあつぱつにな  
てから  
は逆に、彼に迷惑をかけなつこよひに墙やしてこない、どうしてこ  
んなに

成績が落ちてしまったのだらう。

当然、父にも叱られた。

『飯島にならと思つてまかせたのに、一体どうなつてゐるんだ』

彼とつをあつてゐることを知らない父に、こいつなつたのは自分の力不足が原因だと嘗つてあやまつ、ざつにか納得してしまつた。

これから挽回すればまだ間に合つ。やつとて、何度も連絡しているのに、勉強の約束を取り付けられることもできないまま、日ひただけが過ぎていく。

「ざつして、連絡くれないの。昇さん」

声に出したら、鼻の奥がツンとして、頭が熱くなつた。

開いたノートに、じゅくの落ちる音が、繰り返し聞こえる。

私はそのまま、机に突つ伏して、声を殺して、泣いた。

結局、一睡もできずに夜が明けて、太陽がいつものように顔を出した。

身支度を整え、家を出る。

今日は土曜日。いつもなら、近所の図書館で昇さんと勉強をする日なのに  
彼からの連絡はない。

でも、図書館へ行つたら、昇さんに逢える。

もう思つて、顔色が悪いと心配する母を振り切つて出てきたけれど、本当に  
に彼は来てくれるのだろうか？

先週まではなんとも思わなかつた右肩の荷物が、やけに重い。

私……、何のために、勉強しようとしてるんだろう？

自分のため？ 父のため？ それとも、昇さんに褒めて欲しいから？

立ち止まり、アスファルトから飛び出している雑草を見つめていた私の耳  
に、聞き慣れた笑い声が飛び込んできた。

とつそに顔を上げると、そこには、逢いたくて仕方がなかつた彼  
と、もうひとり……。

「昇さん！」

私の声を聞いた彼の目が、見たことのない鋭さを持つてこつちく  
向けられ

た。そして、昇さんの肩くらいしかない身長の女の子の目が、訝し

げに私を見つめる。

「どうして、こんなところにいるんだよ」

駆け寄った私に、彼が冷たい声で訊ねてくる。

「どうして……って。今日は土曜日じゃない」

「へえ、この子なの。昇がお守りを頼まれたお嬢ちゃんって

耳障りな声が、私たちの会話に割り込んできた。

「やめろよ。加奈」

彼が、ぶっきらぼうに言い捨てる。

「とにかく、今日の勉強会は無しだ。また今度に」

「あなただれ？」

私に向き直った彼の言葉をさえぎり、加奈と呼ばれた女性に訊ねた。

「だれ、って。昇の彼女に決まってるじゃない」

「冗談言わないでください。彼女は私です」

「あなたが？」

からかうように私に問つと、彼女はいきなり、甲高い声で笑い出した。

「ほんとに世間知らずのお嬢ちゃんなのね。さすが杓子定規な西森教授の娘だわ」

父の名前を、知つてゐる。

「あのね、一度や一度昇と寝たからって、彼女びらするのはよしですよ。だいたい、なんで彼があんたのお守り引き受けたか知らないの？」

私は思わず、彼女の顔を凝視した。どうしてこの人が、私たちの関係を知つてゐるの？

「昇はね、成績はいいんだけど、遊び好きだから出席率が悪くてね。それを見いただされて、家の事情でつて答えたたら西森教授が同情しちやつて。俺の娘を高校に合格させてくれたら、出席のことは水に流して單位くれるつて言つたの。昇はそれにのつただけ。わかつた？」

「……つむ」

私は昇さんを見上げた。しかし、彼は私を見ようとはしない。

「そういうことだから、頑張つて勉強して昇に単位ちょうどいよね。じゃ

なきや、私たち結婚できないんだから」

すれ違はずま、彼女の手が、私の肩に一、二度触れた。そして。

「悪いな。お嬢ちゃん」

今まで見たことのない、下卑た笑みを浮かべて彼が去っていく。

（待つて！ 行かないで！）

心の中で叫んで振り返ったとき、ふいに、上半身が冷えた感覚に  
襲われる。

そのまま視界が大きく揺らぎ、私の意識は、深い闇の中へ墮ちて  
行つた。

## 5・うわせ

(待つて！ 行かないで！)

手を伸ばしたとき、耳元で機械音が鳴り、私は目を開けた。

「……夢、か

また机に突っ伏したまま、眠つてしまつていたらしい。

まさか、あいつの夢を見るなんて。

「最悪」

携帯電話のアラームを止めて、私は吐きすてた。

あのあと、病院に運ばれた私は、極度の疲労と診断された。

3日間入院したのちにしたことは、進路変更の届けを出すことだつた。

しかし、地元では何の意味もない。私は願書提出ギリギリのタイミングで

今のが高校への受験を決めた。

両親には反対され、父からは勘当まで申し渡されたが、私の決意は変わらなかつた。

高校合格後、私は父に長い手紙を書いた。

あいつのことば一切触れずにいたが、この手紙で何を感じ取ったのか、後日、勤めていた大学に辞表を提出し、今は別の大学で教鞭を取っているらしい。

今でも私から父に連絡を取ることはない。その代わりと言つてはなんだ

けど、母が何かと物を送ってくれる。仕送りも母から。

いつか、父と和解できる日が来るのだろうか？

思いにふけっていた私を、壁時計のアラームが引き戻す。

見上げると、もう7時。バス時間まで、あと20分しかない。

「いけない

私はあわてて、壁にかけてあった制服に手を伸ばした。

今日はここへ元の雨。

傘を差して歩く私の上で、濡れたもみじが風に揺れている。

ふと、私の耳に違つ足音が飛び込んできた。

「の時間、私のほかにここを歩く人はいないはずなの。」

そう思いながら念のため、後ろを振り返る。すると。

「あれ、西森さん」

「三上くん？」

「偶然だね。君もここに近くなの？」

「それまではちのやこつよ。こつもまは皿転車で逆方向に帰るじやない」

「ああ、あれね……」

並んで歩く三上君が、かすかに聞こよどんだ。

「彼女のところにでも行つてゐるの？」

「俺、彼女いないよ

「もてるの？」

「もてるの。俺が？」

三上君が私の顔をのぞきこんでくる。

「な、何でのぞきこんでくるの？」

頬が熱くなってきた私は、あわてて顔をそらす。そんな私に追いうちを

かけるような言葉が、三上君の口から出てきた。

「西森さんに興味あるから」

「……え？」

今度は私が、彼を見上げる番だつた。

「興味のない人に、勉強教えてくれなんて言わないよ。俺は」

「冗談、よしてよ」

「だから、冗談は嫌いだつて言つてるしょ？」

真剣な彼の表情に、私は、一の句が告げずに黙り込む。

「どうしてこの人は、こんなセリフがさうと言えてしまうのだろう？」

これじゃ、あいつと同じじゃない。

無性に腹が立つてきた私は、早足で前に出た。

「ちよつと」

彼にすぐ追いつかれてしまつが、私はうつむいたまま歩を続ける。

「何でそんなに警戒するわけ？」

立ち止まつた私の肩が、思わず震える。

「過去に、何かあつた」

「三上君には、関係ない」

彼の言葉をやえぎり、私は駆け出した。

今度は彼も、追つては来なかつた。

「梓」

学校の前のバス停で降りた私に、香織が近づいてきた。

「おはよつ香織。どうしたの？ 血相変えて」

「あんた、三上君とつきあつてるつて本当なの？」

「はあ？」

なんでそんな噂が出るの？

「何言つてるの。違うわよ」

「昨日、前にあんたに振られた先輩の……。なんて言つたっけ」

「森島さん？」

「そつ。 あの人があ、図書室から一人で出てくるのを見た、って。 もう大騒ぎなんだから」

声をひそめる香織の顔を見て、私は大きくため息をついた。

だから、男の子に勉強を教えるなんて嫌だったのよ。

「あのね、彼には勉強を教えてただけ」

それだけ返すと、私はくるりと後ろを向いた。

「アガツム、アガツム」

「サボる。今日1日その話題に振り回されるなんてごめんだわ！」

ただでさえ朝から機嫌が悪いって言うのに、冗談じゃない。

「梓つたら」

私は、香織の声を無視して、反対方向へのバスに乗り込もうとした。

その手を、誰かが引き戻す。

「三上君」

「逃げでどうするんだよ」

せつぱんと彼は、私の手を引いてぐんぐん中に入つてこく。

「離してよー。」

私は思わず大声をあげた。周りにいる生徒の視線が一いつちに集中する。

「逃げたって何も変わらないだろ。悪いことしたわけじゃないんだから、堂々としてりゃいいんだよ

私の手を引いて歩いていく彼の声には、怒りがこもつている。

私は、彼の後を黙つてついていくしかなかつた。

ざわめく廊下を歩く三上君が、教室のドアを開けた。とたんに、クラスの人たちの視線が集中し、教室にじよめきが起きる。当たり前だ。三上君が、男嫌いで通つている私の手をしつかりと握つているのだから。

教室に入るとすぐに三上君は私の手を離し、自分の席にカバンを置いて教壇のほうへと歩いていく。

「えつと」

教卓に手を置き、彼が口を開く。

すると教室の中のみならず、廊下のざわめきまでもが消えた。

「俺と西森さんがつきあつていてる、つてありがたい噂を今さつき聞いたん ですが、それはまったくのデマなんだ、よろしくお願ひします」

「でもよ。俺、3年の森島から、お前らがいつも図書室に一人きり でいる つて聞いたぜ」

三上君の言葉に、窓際の男子が声を上げる。

「それは、俺が勉強を教えてもらつてるだけ。ここは学校思つたより勉強が進んでたからさ、拝み倒してOKしてもらつたの。第一、図書室なんかでラブシーンできるわけがないじゃん」

「きなり辺りがどつとわいた。

……」、「笑うところじゃないと思つんだけどな。

「西森さんは、俺のわがままにつきあつてくれてるだけ。だから、温かく見守つてくれるとありがたいんで、そういうのとくらじく」

「男らしいな。転校生」

三上君が頭を下げる同時に、担任の古賀先生が生徒の波をかきわけて入ってきた。

「ガキの頃から親父に言われてたんですね。男子たるもの、女性を守れるような強い人間であれ、って」

「ほお~。お前の父さんはずいぶんたくましい人なんだな」

「それのおかげで、海外に単身赴任するばっただく親父に、お袋がついて行つちやつたんですよ。『あなたがいないと寂しいわ。耐えられな

い』と

か言つて。おかげで『つちはいい迷惑なんですから』

教室内に、再度大きな笑い声が起つた。

「夫婦仲がいいのはいいことだぞ、三上。それよりHR始めるぞ。  
みんな戻れ」

古賀先生のひとことで、みんながそれぞれの場所へと戻つていく。

背中を押されて教壇を下りた三上君も、席に着いた。

いつもの静けさが教室に戻つた。だれも、私たちへ視線を送る人はいない。

もしかしたら三上君は、自分の話をすることで、私をかばつてくれたのかな。

私は、前を見る三上君を横目で見ながら、ふと思つた。

「今朝はありがとう」

放課後の図書室で、私は正面にいる三上君に頭を下げた。

「気にするなよ。俺の方こそ君に迷惑かけちゃつたんだから」

「言われてみれば、 そのなのよね」

「ひつでえな」

少しふてくされた彼の顔を見て、私は小さく笑った。

「でもよかつた。俺、もう一度と勉強見てもうえないかと思つてたよ」

「そんなことないわ。 だつて、約束だもの」

「約束・・・か」

「どうしたの?」

少し寂しげな表情を浮かべた三上君に、私は訊ねた。

「別に。先生、 できました」

「はいはい」

彼が解いた問題に目を通す。

「全部合つてゐるじゃない。 これじゃもう、私が教える必要ないみたいね」

「冗談。 けつこう必死よ。 俺」

彼の顔がすごい、 と私に近づいた。 少し上目づかいのその表情がかしく

て、私は思わず吹き出しちまつ。

「俺、お笑い田指してるわけじゃないんだけどなあ。……ちよつと、  
笑い  
す」

「「」めん。でも……」

「あ、いたいた」

声を殺して笑い続ける私の前の扉が開き、佐知子が顔をのぞかせた。

「びひしたのよ、佐知子」

「私も一緒に勉強していい？ 香織、今日から彼氏と勉強するって  
言って  
わざわざと帰っちゃったのよ」

「今日から部活動休みだもんね……って、佐知子は青山君と勉強しないの？」

「淳の話はよしてって言つてるじゃない」

「何？ 嘘睡中？」

少々ふてくされ氣味の佐知子に、三上君が訊ねる。

「喧睡じゃない。別れるの」

「ちやんと話しかけたの？」

「もうここ、あこついたよ。それより私、今度は三上君みたいな彼氏  
が欲しいな」

「え？ 俺？」

驚いた三上君が、自分を指差し佐知子のせつを振り返る。

「うふ。だつて今朝の三上君、めりやめりやかひによかつたんだも

の。や

つぱり、彼女のことを一番に考へてくれる男じやなきやいやね

「それは佐知子のわがまま。青山君、ちやんと佐知子のことを思  
ると思

うねじ」

「余計なお世話。それより三上君、いわわからんだけどな」

話を一方的に打ち切つて、佐知子が三上君の隣に座つた。

「あ、これはや……」

三上君は相変わらず一寧に質問に答えていく。たまに囁く彼の[元]談に、

佐知子はすこへ嬉しそうに笑い、そのたび三上君が彼女の口元に  
人差し  
指を持つてこぐ。

(……あれ?)

なんだか、おもしろくない。

佐知子が一方的に話を切るのはいつもことで慣れっこだし、別に、二

人が楽しそうにしていようが、私には関係ない。

私も、教科書の例題に目を通した。だけど。

(……駄目だ。集中できない)

「あれ? 梓、どこにいくの?」

「ちょっと息抜き。すぐ戻つてくるから」

私は一人の視線から逃れるように立ち上がり、図書室から出て行つた。

(どうしたんだろう、私)

気持ちのもやもやが、おさまらない。

いったい、何にイライラしているんだろう。

今朝から流された、三上君との噂に? それとも、さつき見た佐

知子と

三上君の仲良をやつる姿に?

どうせしても、私には関係のないこと。こんなことで気持ちを乱され  
るなんて、私らしくもない。

「ばかばかしい」

私は小さくつぶやいて、図書室を出ですぐの階段をのぼった。最  
上階に

上がる手前の踊り場に夕焼けが降り注ぐ。

三上君が転校してきてからの数日間、振り回されっぱなしだ。

図書室で、夕焼けを背に本を読む優しい時間も、男子と極力関わ  
らずに  
いることで保ってきた穏やかな気持ちも、彼と関わってから、すべて台無  
しになってしまった、そんな気がする。

（「うな」となら、勉強を教えるやよかつたな……）

そんなことをぼんやりと考えている私の頭上で、足音がした。

振り返ると、そこにほめがねをかけた、見覚えのある人が立っていた。

「森島さん……」

彼は私の姿を確認するや、意味ありげな笑みを浮かべて階段を下りて来た。その笑顔に力チンときた私は、すれ違ひざまに訊ねた。

「どうじつもりなんですか？」

「何がだい？」

「じらばつくれないでください。今朝から流している噂のことです」

「ああ、あれか。僕は、事実をありのままに話しているだけだけど」

「何が事実ですか」

思わず声が大きくなる。

「毎日学校内の図書室にいるだけで、どうじつつきあつていることになるんですね！？ そんなの、おかしいじゃありませんか」

すぐ下の廊下がざわめき始めた。私の声に驚いた人たちが集まつて来た

のだから。でも、今はそんなことにかまつてはいられない。

「根も葉もない噂を流されて、私は迷惑してるんです。金輪際、そんなこと言ふのはやめてください」

私の抗議に、森島さんは鼻でくすりと笑った。

「何がおかしいんです？」

「ムキになると口見ると、おそれい嫌でもない、つむじじやないかな」

私を見下ろす森島さんの表情が、2年近く前に見たあいつに重なる。

思わず私は、田の前にあつた森島さんのほほを思い切りひっぱたいた。

「何するんだよー。」

「……痛つ。離してよー。」

ねじり上げられた腕をふりほどいて動かすが、軟弱そうな風貌とは裏腹に、思つたよりも力が強い。

そこへ。

「いい加減にしたらどうです？ 森島さん」

私の背後から、三上君の声がした。力の抜けた一瞬のすきをついて、私は三上君のそばに駆け寄った。

「ふられた腹いせか何かは知りませんが、ありもしないことをベラしやべって、何が楽しいんですか？ そういうの、男としてみつともないとと思うんですけど」

私を背にかばつた三上君が、踊り場にいる森島さんに告げる。

「だいたい、俺と彼女がつきあおうがどうじょうが、あなたには関係ないんだからほつといてもらります？ 勉強の邪魔ですから。行ひ」

彼は私の肩に手を置くと、下りるよつに促した。その瞬間。

「梓！ 三上君！」

切羽詰まつた佐知子の声が聞こえたのと同時に、大きく視界が揺らぐ。

何かに包まれる感覚がしたのもつかの間、私の体はそのまま落下していった。

(「……、どう?」)

体に走った痛みが、私の意識を徐々に戻していく。

「……か?」

聞き覚えのある、低い声。

ゆっくりと目を開ける。最初に映ったのは、閉められたカーテンと、白い天井。

そして。

「三上、くん」

私を心配そうにのぞきこむ、三上君のまっすぐな目。

「よかったです……。」のまま目が覚めなかつたら、どうしようかと思つたぜ」

彼は、布団の上にあつた私の手を握りしめ、かすれた声とともに、  
安堵の息を吐いた。

「ありがとうございます。もう、大丈夫」

そう言つて体を起こしたけれど、背中に激しい痛みが走つて、そのまま

前に倒れこんでしまひ。

「だめだよ、まだ寝てないと」

「「」めん。……三上君？ ちょっと」

私は、自分の体の前に回された彼の腕に視線を落とした。

「まあ、かたいことを言わないで  
「かたいこと、じゃないでしょ？ ……痛つ」

三上君の腕を振りほどくとしたけれど、背中の痛みがぶりかえす。

「背中を強く打つてるんだ。あまり動いちゃだめだよ」

彼はそう言って、私を抱きしめる腕に力を込める。力が入らない私は仕方なく、痛みが治まるまで彼に身を預けることにした。

「西森さんはね、頑張りすぎなんだよ」

「え？」

思わず顔を上げると、三上君の目が至近距離で私を見つめている。

また顔が熱くなつて来た私は、慌てて視線をそらしつむいた。

「何でそんなに突つ張つてるかはわからないけど、こいつやって、人により

かかるのも、たまにはいいんじゃないか?』

三上君が一定のリズムで優しく、私の頭を叩く。

そのリズムが心地よくて、そつと目を閉じる。

『悪いな。お嬢ちゃん』

三上君の言つとおり、確かに私はあの言葉を聞いて以来、ずっと  
神経を  
とがらせていた。

大学教授の娘で、世間知らず。男にだまされたというレッテルを  
張られ  
るのがたまらなく嫌で、地元を飛び出した。

ここへ来てからも人間と深く関わろうとはしなかった。友達にな  
つた佐

知子や香織にさえも、相談事なんかしたことがない。

でも……。

いいのかな。少し、人に頼つても。

必要以上に男の人を警戒しなくても。

三上君の腕の中で、私は、今まで必死に作つてきた自分の中の何  
かが、  
ゆっくりと解けていくのを感じていた。

「あのや」

三上君の声が、小さな振動となつて私に伝わる。

「何？」

目を閉じたまま私は訊ねるが、彼は何も言葉にせず、黙つている。

「どうしたの？」

再度訊いたとき、彼は私をそつと離した。そして、私の顔をじつと見つめる。

私の鼓動が、急に大きくなり始めた。いつになく真剣な表情に、目をそらすことができない。

「俺……」

三上君が言いかけたとき、保健室の向こう側から、複数の人の足音が聞こえてきた。

三上君は私から目をそらして立ち上がり、ベットの周りのカーテンを開けた。蛍光灯の光が、暗がりに慣れていた私の目にまぶしく映る。

勢いよく、扉が開いた。そして。

「三上君、梓は？」

佐知子の心配そうな声が、私の耳に入ってきた。

「今、田を覚ましたといふ。背中は痛いみたいだけど、大丈夫そうだよ」

「よかつた。梓」

今にも泣き出しそうな佐知子の顔が、私を見た。

「もう、何半べそかいでるのよ」

「だつて、あんなに勢によくおひいきてきたのよ。死んじやつたら  
どうしよ、つて。そればっかり考えてたんだから」

言葉の最後のほうは、涙でこもつてゐる。

「あつがとう。もう、大丈夫だから。泣かないでよ」

私は、ベッドにしつぶして泣き出した佐知子の頭を、優しく叩いた。

「俺ががつちり守つてたんだから、大丈夫に決まつてゐるでしょ」

「その割には三上君のほうが、ピンピンしてゐるようだナビ」

「それを言つてくれるなよ……」

「気まずやつに視線をそらした三上君を見て、私と佐知子は顔を見合わせて吹き出した。

「いつもと変わらない、彼の態度。でも、あのときあなたは、私に何を言おうとしたの？」

三上君の背中を見る私の胸が、かすかに痛んだ。

「梓！」

佐知子に続いて古賀先生とともに保健室に入ってきた母の声が、私を現実へと引き戻す。

「お母さん」

「階段から落ちたって先生に連絡頂いて、飛んできたんだからね。ほら、あなた」

母の後ろから入つて来た人物を見た私は、目を見張る。

「お父さん……」

父は私と田が合つと、気まずやつて吹き出つむいた。

# 「大丈夫か？」 西森

父と母の前に立つ古賀先生が、心配そうに言った。

「あ、はい。ご迷惑をおかけしました」

先生に頭を下げるが、私の心は、父に釘づけだった。

田髪混じりの頭はボサボサ。トレーナーとパンツ姿の格好は、まるで着の身着のまま、慌てて出てきたような感じだ。

私が実家にいることは、いつ自分の生徒が来てもいいように、と  
髪型を  
常にきっちり整え、トレーナーなんて着ていたことなかつたのに。  
「まあ、あなたが三上君ですか。このたびは、娘が大変お世話にな  
りまし  
て……。あなた。あなたつたら」

母が、古賀先生の後ろに立ち少くしていの父を、三上君の前に引  
つ張つ  
ていく。

「あなたからも、ちやんとお祓を頃つてくださいな」

母に氣おされてか、父が三上君に、せりがなく頭を下げる。

「いえ、じつは、梓さんこまつもお世話になりました」

さしもの三上君も恐縮しきりだ。

昔は、常に父の陰に隠れているような人だったのに、何も言わない父をせきたて、遅くまで残つてくれていた佐知子にも丁寧にお礼を言つてゐる。

私が家を出てから、立場がすっかり逆転してしまつたみたい。

「まったくあんたは、あまり親を心配させないでちょうどいい」

ひと通りお礼を言い終えた母の怒りが、ついにこづけに向いた。

「いめんなさい」

私は少し肩をすくませて頭を下げる。

「まあお母さん。とにかく軽症で済んだようですし、とりあえず今日のと

ころは、いのくらこで」

古賀先生に口を挟まれて、今度は母が恐縮する番だった。

「西森はいじ西親と一緒に先生が送つていいくとして。大山、お前どうする?」

「私の家近いですし、一人で大丈夫ですよ」

「近いって、家どこ?」

三上君が佐知子に訊ねる。

「学校出で5分ぐらこのところの商店街あるでしょ? それで喫茶店やつてるの」

「じゃあ、俺が送つていこよ。その近くに用事あるし」

「本當? じゃあ、お喫茶にまえつけやおうかな」

佐知子の顔が、一気に明るくなる。

「やうか。なら頼むな。一人とも氣をつけろよ」

「はい。大山さん、行こつか」

「うん。それじゃ梓、お大事にね」

出て行く一人を見送る私の心はまた、モヤモヤしていた。

夕方、佐知子と三上君が仲良さそうにしていた時と、同じ。

いや、あの時よりもっと強く、痛みすりともなつて。

「しかし西森。お前もこれに懲りて、男嫌いは卒業したらどうだ? みたいに、頼もしいやつも中止はこらへんが」

三上

みたいに、頼もしいやつも中止はこらへんが」

彼のことを考えていたときこふっこが前を出され、私の顔がまた熱くなる。

「な、何言つてゐんですか、先生」

「お、少し赤くなつてゐる。三上に脈あり、かな」

「バカなこと言わないでください。そんなんじゃありません。だいたい先生が、そういうことを言つてもいいんですか?」

心の動揺を押し隠すように、私は早口でまくしたてた。

「もう、梓つたら。すみません先生。口の減らない子でして好奇心につばこの先生の目から逃れるよう、母のまゝへ視線を向ける。

すると、傍らの父の表情がさりげにわざつてこむことづいた。

一瞬、父が私を見た。

しかし、今度は私の視線から逃げ出さないつむいた。そのとき、私ははつきりと語つた。

(お父さん、私が家を出た本当の理由を……知つてこる)

## 10・氷解（前書き）

大変お待たせして申し訳ありませんでした。  
ゆっくりお楽しみ下さい。

「リリに住んでるのか」

家に戻り、部屋の明かりをつけたとき、父が小さな声でつぶやいた。

父と二人きりだと、なんだか気まずい。

母は、といふと、私たちを送ってくれた古賀先生に頼み込んで、近所のスーパーに買い物に出かけてしまった。

いつから、あんなに厚かましくなったんだか。

そんなことを考えながら私は、お茶の準備をするためにキッチンへ立つ

た。背中はまだ痛むけれど、明日は体育を休むくらいですみそうだ。

「お前は座つてなさい」

父がいつの間にか隣に立つていて、私は驚く。

「でも」

「いいから。けが人はおとなしくしてなさい」

父は私をキッチンから追いやると、慣れた手つきで準備をし始めた。

「お父さんでもできるんだ」

「お父さんでも、とは何だ。母さんのいないとき、じれくらこまじてる」

ぶつきりまづに父が言い、一人分のお茶を持ってきた。

「ありがとう」

なんだか急に照れくさくなつた私は、父が入れてくれたお茶を一  
気に飲  
もうとして、思わずむせてしまつた。

「慌てて飲むからだわ。大丈夫か？」

初めて聞く父の優しい言葉に、私の頭が熱くなる。

小さい頃からいつも、自分の仕事で忙しかつた父。一緒に過ぐす  
のは、  
朝の食卓を家族で囲んでいふときだけ。

しかも話題は勉強・成績のことばかり。今のよつな他愛のない会  
話なん  
て、あの頃の我が家には存在すらしなかつた。

でも、今の父は違う。

母の言つまつりいろな人に頭を下げ、私を氣づかい、優しく背  
中をな

でてくれている。

変われるのかな？ 私たち。

大学教授の娘であるがゆえに、勉強や成績のこととで父を煩わせないよう

に考えて、甘えることすらできなかつたあの頃の関係から。

涙をこらえていた私の体を、突然父が抱きしめる。

「……すまなかつたな。梓」

父の声が、震えている。

「俺があんな男を紹介したばっかりに、お前を傷つけてしまつた」

こきなり核心をついてきた父の言葉に、私は小さく首を振つた。

「お父さんせいじやないよ。騙された私がバカだつただけ」

「本当に、やう思つてるのか？」

私を離し、父が心配そうに見下ろしていく。

「当たり前じゃない。お父さんだつて、あいつの言葉に騙されてたんでしょう？」

父の顔が、一気に青ざめた。

「……どうして、それを」

「彼女、つて言つてた人に、みんな聞いたの。彼の嘘にお父さんが同情して、私を高校に合格させたら単位をやる、つて約束したこと。だから私はお父さんを恨むことなんてできなかつた。だって、私と一緒にだもの」

早口で言つた私から皿をそらし、父は、皿の手で顔を覆つた。

その体は、小刻みに震えている。

「梓、すまない。俺はなんてことを……」

「むづこじよ、お父さん。これ以上何も言わないで

床に手をついた父の手をとつた私の頬に、涙がこぼれ落ちた。

もう、じりえきれなかつた。

「お父さん……」

父にすがりついた私は、堰を切つたよつに泣きじやぐる。

ずっと抱えてきた寂しさと、哀しみを開放するかのよつ。

父はそんな私を、いつまでも抱きしめてくれていた。

「ほり、こつまで寝てるの。起きなさい」

母の声と、カーテンの開く音。そして優しい口差しが、私の意識をまどろみの世界から引き戻す。

「今、何時?」

「もう8時半よ」

母の言葉に驚き、私は飛び起きる。すると背中に鋭い痛みが走った。

「まつたく、何やつてんのよ」

母が、呆れた表情で私を見下ろしているのがわかる。

「起こしてくれないからじやないの。完全に遅刻だわ」

「あんた学校に行く気だつたの?..」

「当たり前じやない。テストが近いのに」

母はますます呆れ顔になつた。

「何バカなこと言つてるの。今日は病院行つてから、3人で食事に行くん

だから、早く支度しなさいよ

私はあ然として母を見上げた。

「人の予定を勝手に決めないでよ」

「つむせこわね。たまには親の言つくりを聞きなせこ。お父さんだ  
つて楽  
しみにしているのよ」

お父さんを引き合って出されたひ、承諾せざるを得ないじゃない  
の。

……確信犯め。

「わつこえぱ、お父さんは？」

「散歩に出てるわよ」

「散歩？」の辺のことわかるの？ お父さん

私の問いに、母はクスッと笑つ。

「あなたは知らないだらうけど、お父さん、時々様子を見に来てた  
のよ」

「……え？」

「何だかんだ言つたつて、やつぱり梓のことが心配だつたのよ。大  
事な一

人娘なんだもの」

母の言葉を聞いて、急に、くすぐったい気持ちになる。

考えが固くて、頑固で、かなり不器用。でも、一部の学生さんには慕われていたのを思い出した。

「基本的に面倒見がいいくせに、照れ屋さんなのよね。お父さんは」

「あらあんた、わかつてんじやないの」

母と顔を見合させて、私は笑つ。

そこへ父が戻ってきた。

「ずいぶん楽しそうだな」

「お父さんの悪口言つてたの。ね、お母さん」

私たちを見る父の顔が、とたんに青ざめる。

「冗談に決まつてるじゃないですか、お父さん。でも、『ほんにしまじょひ』

あからさまにホッとした表情を浮かべた父を見た私の頬もゆるむ。

考えが固くて、頑固で、かなり不器用。そして……単純。

そんな父が好きだ。私は、改めてそう思った。

「あれ？ 梓さん」

病院の待合室で父と2人で座っていた私が、聞き慣れた声に振り返ると

ギター・ケースを抱えた少女が駆け寄ってきた。

「千佳子ちゃん。久しぶりね」

千佳子ちゃんは佐知子の妹で、音楽の道を志している中学2年生。佐知子のお父さんが小児科病棟の先生と知り合いだと、時々、この病院に慰问をしにやつてくると佐知子に聞いたことがある。

「今日はどうしたんですか？」

「昨日学校でちょっとケガしちゃってね。佐知子に聞いてない？」

「それが……」

千佳子ちゃんの表情が、少し曇る。

「どうしたの？」

「お姉ちゃん、昨日家に帰つてこなかつたんです」

「帰つてこなかつた？」

「どんなに遅くなつても必ず帰つてくるの」、連絡すらなかつたら、お母さんがあずく心配しちやつて……。心当たりありませんか？」

一瞬、いやな予感が頭をよぎる。

昨日、最後に佐知子を見たのは、三上君と一緒に帰つていぐ姿。送つていぐ、と三上君が言つたときに見せた佐知子の嬉しそうな笑顔が、頭の中に焼きつぐ。

もしかしたら……。

「梓さん？」

「え？ あ、」めんね。昨日は両親と一緒にだつたし。わからないな

「そうですか。すいません。変なこと訊こちやつて」

笑顔を作つて会釈をし、帰つて行く千佳子ちゃんの後ろ姿を見送る私の心に、また、モヤモヤが広がつていぐ。

三上君と佐知子のことを考えるたび、心の痛みが強くなる。

どうしたんだろう？ 私。

自分の心がわからない。

「どうした? 梓」

心配でひい父がのんきにいんでくれる。

「ううう。何でもないの。気にしないで」

私は父の顔を見ないで答えた。すると

「お前、本当に三上君のことを好きなんじゃないのか?」

突然の言葉に驚いた私は、思わず父を見上げた。

(私が、三上君を……好き? )

自分の心に問いかける。

こつもなら真っ先に「違う」とこつ答えをはじき出してくれる私の心は

このとき、何の反応も示してはくれなかつた。

「そんな……」

突然の父の発言に、私はそう答えるのが精いっぱいだった。

（三上君を好きなはずないでしょ？…梓。だつて、一度恋をして決めたんだから）

私は、自分自身に言い聞かせるように心の中でつぶやく。

だけど私の言葉は、佐知子と一緒にいる彼を想像するだけで痛み出す心には届く」など、虚しく空回りするだけだった。

「もう、自分を解放してやつたらどうだ？…梓」

「え？」

「お前を男嫌いにするきつかけを作った俺が言えた義理じゃないが、今の自分の気持ちに素直になつて、新しい恋をしてみたらどうだ？」

自分の、気持ち……。

父の言葉で真っ先に浮かぶのはやつぱり、三上君の顔。

高校に入学してから今まで、男の子の存在を入れることすら許さ

なかつ

た私の心の深い場所に、彼はすんなりと入つてしまつてゐる。

好きになつてしまつてゐるんだ、もう。三上君のことが。

そう自覚した途端、急に自分の心が楽になつていくのを感じる。

もちろん、彼が私を好きでいてくれてゐる保証なんてないし、佐知子と  
のことも気にかかるけれど、私は2年足らずの間に持ち続けていた  
重い荷  
物を下ろすことができたような、そんな気がした。

「ありがとお父さん。私、頑張つてみるね」

私の言葉に、心配そうに見つめていた父の顔がほこりんだ。

「おはよー、梓。もう大丈夫なの？」

翌朝。バスから降りた私に、早速香織が話しかけてきた。

「おはよー。おかげをまで何とかね」

「昨日の朝、先生に聞いたときはじつくりしたんだから」

「「あん。まさかあんなことになるなんて思わなくて。……どうし

たの？」

私の顔をじっと見つめている香織に訊ねる。

「ねえ。何かいいことでもあったの？」

「じつして？」

「いつもと違つて、何となく吹つ切れたような顔してるから」

「ああ。久しぶりにお父さんといろいろ話したからかな」

「ケガの功名、つてやつ？」

「多分ね」

私がこの高校に入学した事情を知らない香織だけど、今まで話したことのない父の話題がすつと出たのを聞いて何かを感じたのだろう。すんなりと納得してくれた。

「あれ？ 西森さん。出てきて平氣なの？」

背後から三上君の声がした。突然の出来事に、私の頬が熱くなる。

「うん。ありがと。もう大丈夫」

平静を装つて返事をするけれど、心臓の鼓動が大きくなるのがわかる。

「おせよ! 二上君。ねえ、どうしたの? その傷」

「ああ、これ。ちゅうとね」

やつと二上君の方を見ると、香織の問いかねる二上君の頬には、いくつかの傷がある。

「あ、そうだ。西森さん」

「何?」

「悪いんだけど、今日の勉強会、ナシにしてくれるかな?」

「うん。わかった」

内心がつかりしつつ、私は彼につなずく。

今は少しでも、二上君のそばにいたかったの!。

「ありがと! 明日からまたよろしく」

軽く手を上げて校舎に入つていく後ろ姿を見送る私の背後から、いきなり香織が顔をのぞかせた。

「あ・ず・わちやん」

「な、何よ」

普段見せない香織の満面の笑みに、私は少しイヤな予感を覚えて後ずさる。

「三上君のこと、好きになつたの？」

突然耳元でささやかれた一言に、私の頬は再度熱くなつた。

「図星……だね」

香織つてば、何でこんなにカンがいいんだろう。

観念した私は、小走りつなづく。

「そつかあ。梓もついに恋する少女になりましたか」

「声が大きいわよ」

「いいじゃない。」これで公認カップルの誕生だもの

「公認、つて……。彼が私を好きだとは限らないじゃない」

自分にも言い聞かせるように、香織にクギを刺す。しかし。

「そんなことないわよ。全く、何でこんないい時に佐知子は休んでるのよ」

「佐知子が、休んでる？」

香織がうなずいた。

「そう。昨日は三上君もお休みだつたんだけどね」

香織の言葉に、昨日抱いていた不安が私の心を覆う。

昨日休んだ一人。勉強会を断つた三上君、そしてまだ、私は佐知子の姿を見ていない。

他人の恋愛事情に一人浮かれている香織をよそに、私の心がまた痛み出す。

そして。

佐知子は今日も、学校には来なかつた。

気がついたら、放課後だつた。

ぶつちやけてしまえば、一日をどうやり過ごしたか、記憶がない。あんな事件のあとだもの、クラスの人からの質問攻めにもあったような気がするけど、はっきりとは覚えていない。

ただ、学校を休んだ佐知子のことが気がかりで。

いや、違う。

おととい、一緒に帰ったはずの一人に何があつたのかが心配で、授業中も上の空だった、ような気がする。

ばかみたい。

これじやあ、あの人に冷たくされた約2年前と同じじやないの。何だかんだ言つても、恋をすれば結局同じ。

たとえ片思いでも、その人のことが気になつて仕方がないんだ。

「梓、帰らないの？」

三上君との勉強会がないことを知つてゐる香織が、私に声をかけ

ててくる。

「うふ。ちゅうと、寄るといいのがあるから」

「何？ 早速告白するの？」

今日は一日、にやけっぱなしの香織がにじり寄つてくる。

「違うわよ。佐知子の家に行くだけ」

佐知子に、確かめたいことがあった。

青山君とは本当に別れるのか。そして、三上君のことをどう思つてゐるのか。

そんなことを私が詮索する義理は全くないのだけれど、はつきりさせて

おかなければ、気がすまない。

「やうね。私も行こうかな？」

「勉強は？」

「大丈夫よ」

香織は携帯電話を取り出した。

「もしもし拓海？ 実は今日、友達の見舞いに行きたいんだけど勉強会、パスしていいかな？」

拓海、というのは彼氏の名前。で、フルネームは中川拓海。

入学式の帰り道にナンパにあつて困っていたところを助けられて、  
香織  
は彼に一目ぼれ。

彼が入部した柔道部に自分も入つて、素人ながらも努力している  
香織に  
惹かれた中川君のほうから、告白してくれたらしい。

「よし、と。私も行くからね。佐知子にも報告して、告白の段取り  
つけな  
くちゃ」

「ち、ちょっと、勝手に決めないでよ。私のことよ」

「何言つてるのよ。今まで男嫌いで通してきた梓に、まともな告白  
ができる  
るわけないじゃない。私たちが面倒見ないでどうするのよ」

「ねえ、人の恋路を楽しんでない? 香織」

「ばれたか」

肩をすくめて舌を出す香織を軽くどつきながらも、少しだけ、私  
の心は  
軽くなつた。

「まあ、梓ちゃんに香織ちゃん。いらっしゃい」

佐知子によく似た面差しの女性が、私たちを招き入れてくれた。

狭い路地にたぐさんの店が立ち並ぶ商店街にある、ひょっとおしゃれな

喫茶店、ミコーズ。

佐知子の「両親が経営する」のお店の2階部分が、佐知子たち家族の住むプライベートルームで、何回か香織と泊まりにきたこともある。

「佐知子さん、部屋にいますか？」

「それがね……」

香織の問いかげ、お母さんが顔を曇らせた。

「昨日の夜遅くに帰つて來たと思つたら、また出て行つちやつたのよ。あの子最近、何も言つてくれないから何考えてるかわからなくて。心あたりないかしら？」

確かに佐知子は、青山君とつきあつてゐることは親に話していないはず。

私たちは顔を見合させて、黙つて首を振るしかなかつた。

「まつたく佐知子つたら、学校休んでどうまつつき歩いてるんだろ  
う。  
ね？　梓」

「そうね……」

香織とともに乗り込んだ古いバスの中で、半分上の窓で返事をする。

幾度となく抱いていた、いこいのない不安が現実のものとなつて、私の心に押し寄せる。

やはり一昨日の晩、三上君と佐知子の間に何かがあつたんだ。

それが何なのが知りたい。でも、知りたくない。

知つてしまつたら、私の想いの行き場がどこにもなくなつてしまいそうだ。

そんな私の腕を、香織が急に引っ張り上げた。

「もう降つむといひだよ。じつじたの？」

訝しげに私の顔を見る香織に、私は小さく首を振つた。

「なんじと、香織には言えない。」

「佐知子のことで心配事でもあるわけ？」

私の家に向かつて歩く道すがらで、案の定香織が訊ねてきた。

「ねえ。何でそんなに一人で抱え込んだやうわけ？ 私、そんなに頼りないかな」

押し黙る私に、香織の声が少し荒くなる。

「そうじゃないよ」

「だったら話してよ。私たち、親友でしょう？」

香織の真剣なまなざしが、あふれてくる涙でぼやけた。

「……よし、家に帰つたら大暴露大会よ。いいわね」

まなじつの涙をぬぐって、私はうなずく。

そのときだつた。

家に向かつて歩き出した私たちの田の前に、今、私が一番見たくない光景が、あつた。

「三上君。……佐知子」

香織の声に、表情がさつと変わった一人がこっちを見た。

不安に押しつぶされそうな私が今、一番見たくなかったその光景。

それは。

涙ぐんでいる佐知子の肩を、そつと抱き寄せている三上君の姿だった。

「ちょっと、どうこうことなのー?」

何も言えない私に代わって、香織が声を荒げて一人に訊ねる。

「別に、どうだつていいじゃない」

するとすかさず佐知子が反論に出た。

「佐知子、あんたね。青山君がいながら何やつてるのよ」

「淳とは別れたんだもの。誰と何をしようが、私の勝手よー。」

青山君と、別れた?

佐知子の言葉が鋭いナイフのよつこ、私の心に突き刺さる。

「あんた、親友を裏切る気なの?」

香織がいきなり本題に入った。

「裏切る、つてどうこうことよ。別に、私が三上君を好きになろうが、香織や梓には関係ないじゃないのー。」

私の気持ちを知らない佐知子の言葉が終わると同時に、香織の手が彼女の頬に飛んだ。

「何するのよー！」

佐知子も香織の頬を打つた。

「おい、いい加減にしろよー！」

香織が再度、佐知子をぶといた手は、彼女をかばつた三上君の頬を強く打つた。

「三上君ー！」

佐知子の悲痛な声が、私の心を引き裂いた。

そして、三上君の赤く染まった頬を見たとき、私の中で何かが、切れた。

「……行こう、香織

「梓？」

「もういい。行こう」

「何言つてるのよ。あんた、このままでいいの？」

「いいって言つてるじゃなー。この一人がどうつきあおうが、私は関係

ないもの

私は三上君の顔を見すえて言い切った。

所詮、男なんてみんな同じ。

恋人がいながら、私を抱いたあいつのよつて、三上君だって、お  
ととい

私を抱きしめた腕で、今日は佐知子の肩を抱いている。

その事実が、今の私にはたまらなくいやだった。

「ちょっと、梓」

私は香織の腕を引いたまま歩き出す。

「ちょ、待つてくれよ。一人とも」

三上君が、私たちの前に立ちふさがった。

「何か、えらく誤解されてるようだけど」

「どいて」

私は彼の言葉をさえぎった。

「話へらい、聞いてくれたつていいだろ」

「聞きたくない」

「西森さん」

「お願い！ これ以上……、私の心に入つて」ないで」

私は涙を必死にこらえて三上君に言つたあと、香織の手を離して走り出す。

「西森！」

彼の声が追いかけてくるけれど、私はかまわず走り続けた。

「これ以上三上君のそばにいれば、彼への想いがあふれてしまつて、今の態勢を保つことができなくなつてしまつ。

「待つてよ、梓」

追いかけてきた香織の手が、私を捉えた。

「どうしてあんなこと……！」

私が泣いているのを見てか、香織の言葉が途中で切れた。

そしてそのまま、香織の手がそつと私の頭を抱きしめる。そのぬくもりで、心の奥で必死につないでいた細い糸が切れた私は、香織にしがみついて、大声で泣き出した。

「……そんな事情が、あつたんだ  
家に帰り、ここに来るまでのすべてを打ち明けた私に、香織がつ  
ぶやいた。

心が冷え切った私の前には、香織が入れてくれたホットココアが、  
やかな湯気を立てている。  
ゆる

「世の中には、最低な男もいるもんよね。まつたく」

香織が心底いややつに呟いてくれたおかげで、私の気持ちが  
少し大きくなる。

「でも、本当にいいの？」「のままで」

三上君のことを語りたててくれる彼女に、私はうなずいた。

「振られるにしても何にしても、きつちり気持ちを打ち明けなきや  
後悔する」と思つた。私は

昨日の父と似たようなことを言つてくれるけれど、私のなかにはも  
う、そ  
んな勇気はひとつかけらも残つていない。

「あへ、男の子とのことで傷つきたくないの。忘れるまづが、あつ

と楽だよ

「まあ、梓がやつぱになら私は何も言わないけど。でもわ」

田のマグカップを手に持つた香織が、そこで言葉を切った。

「でも、何よ」

「うん。……あの一人、本当に面思いなのかな?」

「やうなんじやないの。おとこにだって、べったりだったし」

つとめて冷静に、私は言った。

「私はやつぱ思わないんだよな。だって、佐知子はまだ青山君に未練ある

だらうし、三上君だって」

「彼の話はやめて」

これ以上三上君の話は聞きたくない。

「……」めん

香織に気を使わせて申し訳ないとは思つけど、今の私は、たとえ一時的にでも、彼の存在を心から追い出さうとして精いっぱい。

「それじゃ、私そろそろ帰るけど」

香織が立ち上がった。時計を見ると、午後6時を少し過ぎている。

私と違つて、自宅住まいの香織を、わがままで引き止めるわけにはいかない。

「うん、大丈夫。どうもありがとう。気をつけてね」

私も立ち上がった。そのとき、部屋のチャイムが鳴る。

私は思わず香織を見た。この部屋を知っているのは、今朝帰つた両親に  
香織と佐知子の一人だけ。香織はともかく、両親も佐知子も、今来ること  
はありえない。

私の警戒するぞぶりを見てとつたのか、田で合図した香織が玄関  
先へ向かう。

「はい。どちらさまですか？」

「あ、鎧岡さん。西森さん、いるかな？」

(……三上、君)

声の主に気づいた私の体から、力がすっと抜けていった。

物語の前に失礼します。作者の笠原綾乃です。

昨日7月19日付けのアクセスランキングにおいて、2位にランクインさせていただきました。

これもひとえに、興味を持つてくださる方々のおかげだと思つております。

ありがとうございます。

お話もいよいよ終盤、あと2話を残すのみとなつましたが、最後までおつきあいください。

今後とも、よろしくお願いいたします

「よく、ここがわかつたわね」

香織の声が、玄関へ続くドア越しに聞こえる。

「大山さんに教えてもらつたんだ」

三上君の口から出た佐知子の名前に、私の心がまた痛み出す。

「三上君、ちょっとといいかな？」

香織の言葉と同時に、玄関のドアが閉まる音がした。

玄関先まで出れば、一人の会話を聞くことはできる。けれど、今  
の私に  
体を支えるために持つていてるこのドアノブを、まわす勇気はない。

一人は今、どんな話をしているのか。

時間を刻む針の音だけが、私の頭の中にひびく。

私は部屋の中央まで戻り、冷めたココアを口にした。でも、味は  
わから  
ない。

三上君は私に、何を言つつもりでここに来たんだろう？

そして佐知子は、どうして彼に私の家の場所を教えたりしたんだ

ルル。

考えれば考えるほど、頭の奥が冷えていくのがわかる。

「のまま、三上君が帰つてくれればいいのに。

「梓」

香織が、部屋に戻つてきた。

「三上君が、ビルしてもあなたと話がしたいって」

私は無言のまま首を振る。

「のままじゃ、何も変わらないんだよ。話したいことがあるなら  
ぶちま  
けちゃって、後で泣けばいいじゃない。私、とにかくあつから  
れ。ね」

香織がそつと、私の肩に手を置く。

「それに彼、梓が出てくるまでずっと待つてゐるってよ」

香織が少し困った表情で、玄関のほうを見た。

本当は、会いたくない。会つてしまえば、今、必死に忘れようとしている彼への想いが、心からふきだしてしまつた。

でも、少しずつ気温が下がつていく今の時期に、三上君を「のま

ま外に

待たせておくわけにはいかないし、香織のこともこれ以上引き止め  
るわけ  
にはいかない。

私は、意を決して立ち上がった。

「それじゃ、外で待つてるからね」

香織はそう言つて、玄関から出て行つた。何度も『帰つていい』  
と言つ  
たけれど、彼女は譲らなかつた。

入れ替わりで、三上君が玄関へ入つてきた。私の心と体が、一氣  
に硬直  
する。

「『めん。無理やり呼び出しちやつて』

私は、彼の顔を見ずに小さく首を振る。

「さつきのことに關しての、言い訳はしないよ。理由はひとつあれ、  
君が見  
たままがすべてだらうから。でも、これだけは聞いてほしくて來た  
んだ。

一昨日の夜も言いかけたんだけど、俺が好きなのは……  
西森さ  
んだけだから

一昨日からかすかな予感はあつたけれど、突然の告白に、私は身動きがとれなくなつた。息が苦しい。

今朝までは、一番聞きたかった彼の言葉。でも今は、一番聞きたくなかった、言葉。

一度解き放たれた過去の痛手に、再度とらわれてしまつた私の選択肢は、いつもの言葉しかない。

泣かないよ。いつもと同じよ。この言葉を、伝えるだけ。

「……ごめんなさい」

私は、体中の力をふりしぼり、深く頭を下げた。

泣かないよ。唇を噛み締めるけど、涙がどんどんあふれてきて、私の足元に落ちる。

それに気づいたのか、三上君がいきなり、私の体を引き寄せた。

私は逃れようと力を込めるけど、彼はきりしきりつづく抱きしめてくる。

「俺じや、だめなのか？」

私の体が、小さく震えた。

「俺じや、君の男嫌いを払拭することはできないのか？」

（ダメじや、ない……）

心の中で、私はつぶやく。

もうすでに、『男嫌い』じゃなくなっているんだもの。できるなら、このまま彼の心の中に飛び込みたい。

でも。

佐知子の肩を抱いていたときの光景が、私の心から離れていかな  
い。

青山君と別れた佐知子が、三上君のことを持つていて、再び  
血が流れ出した私の心の傷が、かさぶたになつてはがれてくれることはな  
いだろう。

好きな人を疑つたまま、つきあつていきたくはない。だから。

私は、三上君の腕の中ではつきりとうなづいた。

「そ、うか。……わかった

浅くため息をついたあと、彼は私をそっと離した。

「今まで、いろいろありがとう。困らせてばっかりでごめんな

彼はそう言つと、私に背を向けてドアの向こうに姿を消した。

『「ごめんなさい』

今までは、傷を負つて いる自分の心を守るためだけに、何も考え  
ずに(ニ)の言葉を使つてきた。

でも今は、好きな人を傷つけてしまった罪悪感と、自分自身を偽  
つた悔

恨が、あまりにも重く、私にのしかかる。

耐え切れず膝からぐず折れた私の頬を、涙がとめどなく伝つて、  
落ちた。

携帯電話のアラーム音で、私は目を覚ました。

「やだ、ひどい顔」

床の上で寝たせいか痛む体を起こし、テーブルの上にある手鏡をとつてつぶやいた。

昨日、三上君が帰ったあと、わたしはまた香織の前で泣いた。

香織は私を責めるようなことは何も言わず、ずっとそばにいてくれた。

『ひとどはいい恋ができるわよ。きっと』

そう言つて何度も励ましてくれた。それがどんなにありがたかつたか。

とりあえず顔を洗おうと立ち上がった私の耳に、メールの着信音が聞こえた。香織からだ。

『おはよう。昨夜はよく眠れましたか？  
今日は風邪で欠席、と届けておきますので、ゆっくり休んでいいからね。』

明日から中間テスト。お互に頑張りやせー。』

「ありがと。香織」

お礼のメールを返信したあと、私はつぶやく。

いい友達を持つてよかったです。私は、心からそう思った。

香織の気づかいで学校へは行かずすんだものの、私の気分は晴れない。

テスト期間中は、出席番号順で着席するから三上君とは離れるけれど、

問題は、テストのあと。

彼の隣の席にいること、今の私は耐えられそうにない。現に、

テスト

勉強を始めるものの、まったく頭に入つてのがその証明だ。

自分から彼をふったくせに、それを後悔している自分がいる。

三上君のことを頭の中から振り払おうと小さくかぶりをを振った私の目から、また、涙がこぼれてくる。

すると突然、玄関のチャイムの音が鳴った。

時計を見ると、まだ12時半。

学校から実家に連絡が行つたかな？ なんて言い訳しよう。

「はい」

かすれた声で返事をして、ドアノブに手をかけた。  
すると。

「……佐知子」

ドアを開けた先には、佐知子がこわばつた顔をして立つていた。

「どうしたの？ 授業は？」

私は、佐知子から田をそらして訊ねた。

「話があるんだけど、上がつていいかな」

「悪いけど、今度にしてくれる。具合が悪いの」

「逃げる気？」

突然の佐知子の問いに、私は思わず彼女を見る。

「三上君に聞いたわ。梓にふられたって。どうして？」

「佐知子には関係ない」

彼女の声が終わるかどつかのつむこ、私は言つた。

「答えになつてない。ほんとは三上君のことは、好きなんでしょう? だつたら」「

「だれのせいだと思つてゐるのよー」

今度は佐知子の言葉をえぎつて、私は叫んだ。

「青山君がいたくせに、三上君にもふらふらしてた、あんたのせいじゃな いの!」

「自分の臆病さを棚に上げて、人のせいにしないで! 男の子とつきあわ ないのは私の主義、みたいな顔して、本当は、過去のことについてま でもと らわれてるだけじゃないの」

佐知子の言葉が、私の心を深くえぐつた。

「どうして、それを……」

「あの事件の夜、あんたのお母さんに聞いたの。梓が恋をしないの は、中 学のとき、家庭教師をした人に、ひどいふられ方をしたことがあ るから かもしけないって」

そこまで、母は佐知子に話していたんだ。

「三上君は三上君よ。梓をふつた男のような、ひどい人なんかじゃない。

それは、梓が一番知つてゐるはずでしょ？」

……そう、知つている。

三上君がいつも、私のことを気にかけてくれていたことを。

噂が出たとき、コーモラスに事実を告げて収めてくれて。

森島さんに突き落とされたとき、私をかばってくれて。

そして。

私が「男嫌い」であることを知りながら、想いを告げてくれた。

でも、正直に言つと、どうしたらいいのかがわからない。

「ああ！　もう、じれつたいな。あんたが三上君に告白しないんだつた

ら、私が彼に告白するわよ。それでもいいの？」

佐知子の容赦ない言葉に、私の心が凍りつく。

彼のことを好きなくせに、佐知子はどうしてそんなことを言つてくれる

のだろう。第一、私はどうに、彼を切り捨てた人間だ。そんな私が

彼に

今さら告白をして、何になるといつの？

「どうせ私はもう淳と別れたんだし、梓が三上君に告白する気がないの

なら、私が三上君の彼女になるわ。だれにも文句は言わせない」

佐知子は、私の目をまっすぐ見て宣言した。

「じゃあね

私に背を向けた佐知子は振り返りもせず、そのまま部屋を出て行った。

ドアの閉まる音が、私の耳に重くひびいたとき、田の前に突然、暗闇  
がひろがった。全身に冷や水をかけられたような感覚に捉われた瞬間、

私はそのまま、意識を失ってしまった。

(「は、どう?」)

私はいつの間にか、前後左右すべてが闇に包まれた場所に立っていた。

『悪いな。お嬢ちゃん』

2年前、そう言って私の前から去っていった「初めての彼」飯島昇と自称「彼女」の姿が目の前に浮かんだかと思いつと、いつの間にかそれは、三上君と佐知子の姿に変わっていた。

『ごめんな。梓。私たち、つきあつことになつたから』

三上君に肩を抱かれた佐知子が、私からゆっくじと遠ざかっていく。

追いかけたいのに、足が動かない。

(待つて! 行かないで!)

言葉にしたいのに、声が出せない。

私、まだ何も伝えていない。

一番大切な『好き』といつ言葉を。

三上君に伝えていない。

彼らに向かつて差し出した手を、だれかが強く握りしめた感触で目を開ける。すると、見慣れた天井の前で、髪の長い少女が心配そうに私をのぞきこんでいた。

「……香織？」

「よかつた。意識が戻つて」

「私……」

頭にもやのかかった状態で、私はつぶやく。

「玄関で倒れてたのよ。いつたい、何があつたの？」

香織の言葉にハツとした私は起き上がるひつとするが、香織に制止される。

「おとなしく寝てなきやダメじゃない」

「私、行かなきやいけないとこりがあるの」

「行く、つてど」「く？」

「三上君のところへ

間髪入れずに答えた私を見る、香織の目が変わる。

「まさか、梓」

「三上君に、私の気持ちを伝えたこの。……後悔したくない」

香織の目をはつきりと見すぎて、私は言つた。

三上君が、私を今度受け入れてくれるかはわからない。

でも、何もしないまま終わりたくない。

「どうしていきなり？ それこそ、テストが終わってからじゃダメなの？」

「今じゃなきゃダメなの。理由は、帰ってきたら話すわ。だから「……わかった。その代わり、何があつても連絡ちょうだい」

私の真剣な表情に負けたのか、うなずいた香織がそつと、私の手を握る。

「三上君とうまくこつたら帰つてこなくてかまわないから、メールして。

約束よ」

香織のまっすぐな言葉に、私の頬は熱くなる。

「帰つてくるわよ。必ず」

私が、照れ隠しに肩をすくめて答えると、香織の顔に笑みが浮かんだ。

勢いにまかせて外に出たはいいものの、私は肝心なことを忘れていた。

それは、三上君の家の住所。携帯番号も当然知らない。

「」の近くに住んでることはわかつていても、正確な場所が特定できなければ、訪ねて行きようがない。

行くあてもないまま、自転車の周りを一周した。

空は少しづつ暗くなつていき、空気も冷えてくる。

距離を歩くほど、私の背中を押した勢いも、彼に想いを伝えようといつ

勇氣も、少しづつしおんでいく。

「どうしよう……」

もう一周しようか。それとも、帰ろうか。

逡巡している私の耳に、聞き慣れた笑い声が飛び込んでくる。

後ろを振り返ると、三上君と佐知子が、夢で見たままの姿で歩いてくるのが見えた。

「……梓」

佐知子も三上君も、驚いた表情でこっちを見ている。

逃げ出したい衝動にかられたけれど、彼らから視線をそらす」と  
で、か  
ろづじてそれを抑える。

今、言わなくちゃ。

私は一生、後悔する。

「どうしたの？」 『なんといひで』

佐知子が一步前に出た。

「佐知子」

私は、少し『わばつ』ている佐知子の顔をまっすぐ見た。

「私、やつぱりゆずれない。自分の気持ちに嘘はつきたくないの」

佐知子が目を見開いた。

「私は、三上君が好き。……『ごめんなさい』

私は謝罪の言葉と一緒に頭を下げた。

「梓

顔を上げた私の頬が、大きな音とともにこきなり熱くなる。

「言つ相手が違うのよ。バカ」

頬を押された私に向かって言つ佐知子の声が、震えている。

「しようがないから、三上君は梓にくれてやるわ。でも、餞別代わりにひとりだけ教えてあげる。私と淳が別れた原因作つたのは、三上君なんだから。彼氏の責任とつて、あんたも私の恋人探しに協力するのよ。いいわね」

まくしたてるように言つと、佐知子は私たちに背を向けて歩き出す。

「……佐知子！」

「のうけ話なんか聞きたくないわよ。じゃあね

（『ごめんね。佐知子。……ありがと』）

曲がり角の向こうへ消えていった佐知子の背中を見送る私の目か

ら、温

かい涙がこぼれ落ちた。

## 17・決意（後書き）

こんにちは。作者の笠原綾乃です。ここでお読みと訂正をさせていただきます。

15話の前書きにて「残り2話」と表明していましたが、お話の都合上、次回の18話で最終回と相成りました。

予告と違つ状況になつたことを、心からお詫びいたします。

次回が本当の最終回です。どうぞよろしくお願いします。

「西森さん」

佐知子を見送る私の背後から、三上君が声をかけてきた。

とたんに、私の頬が熱くなる。

「俺のこと、好きって本当?」

三上君が私の正面に立つて訊いてくるけれど、まともに顔を見る  
ことが  
できずに、うなづくだけ。

「もう一度、言つてくれないかな」

突然の申し出に、今度は私の鼓動が早くなる。

「今度は俺だけに、ちゃんと言つて欲しいんだ」

そう。私は三上君のいる前で、佐知子に彼への想いをぶちまけて  
しまつ

ただけて、彼にはまだ、きちんと言つていなかつた。

でも……。

いざ、好きな人に告白するとなると、こんなにも胸が苦しくなる  
ものな  
のか。

私の耳には今、自分の心臓の音しか聞こえない。

考えてみたら私は、今まで自分が好きになつたひとに、告白したことがない。なかつたんだ。

何も言えずに立ちぬく私の手を、三上君がそっと握つてきた。

「俺の気持ちは、変わつてない。西森さんが好きだよ」

三上君の2回目の告白に、私は小さく息を吐いて顔をあげる。そして。

「私も、三上君が……好きです」

消え入りそうな声でやつと囁いた私の体を、三上君が引き寄せた。

彼のぬくもりに身をまかせる私の手から、なぜか涙がこぼれ落ちる。

「なんで泣くんだよ」

頭を優しくなでる彼の言葉に小さく首を振るけれど、涙は止まらない。

三上君の大きな手が、私の頬にふれた。

涙をぬぐうと、彼の顔がゆっくつと近づいてくる。

私はそのまま、田を開じた。

三上君との初めての口づけに、私の心と体が熱くなる。

今まで抱えてきたつらに過去も、心の傷を守るためにつけていた  
頑丈な  
鎧も、彼のぬくもりで、ゆっくりと溶けていく。

彼となら、何があつても歩いていける。

どんなことがあつても、彼を信じて、ついて行ける。

互いを好きだといつ気持ちがある限り、どんな壁も乗り越えてい  
ける。  
きっと。

「……せつとき、佐知子が言つてたこと、本当なの？」

何度田かのキスのあと、私を再度抱きしめた三上君に想いに切つ  
ていつ  
訊ねた。

「うん。俺らが森島さんにてき落とされた田の夜、大山さんを送つ  
たときにはちあわせしてさ、大ゲンカしちゃったんだよ。あの一人  
でいつ

三上君の話によると、普段、佐知子に言われのない浮氣のことを

厳しく

追及され、別れる別れないを繰り返していた青山君は、びつやらそれでキレてしまつたらしい。

「で、いきなりあいつが大山さんを殴つたとするからや、間に入つたらここのざまだよ」

傷跡が残つてゐる頬を指さして、三上君が苦笑いをした。

「で、当然俺に責任があるわけだから、何とかあの一人を元に戻してやりたかったんだけど……。結局ボツッてわけ」

「佐知子、大丈夫かな」

「今ごろひとりで泣いてるんじゃないかな。早いとこ、いい男探しやんないと。だれか知らない？」

「私が知るわけないじゃない。学校内で知らない人はいないくらいの『男嫌い』だつたんだから」

そつが、とつぶやきながら、三上君は大きくため息をつく。

「まあ、俺ヨリいい男なんてそつそつしないだらうけど、探してみるか」

「ずいぶんと自意識過剰なのね」

私を心配させないための冗談だとわかつてはいるけれど、あえて突っ込んでみる。

「当たり前っしょ？ なみいる馬を蹴散らして、『男嫌い』だった君の彼になつたんだから也」

「……バカ」

急に照れくさくなつた私は、田の前にある彼の胸に、軽くパンチを当てた。

「いつてえな。何するんだよ」

お返しにとばかりに、三上君が私の頭を小突いた。

そして一人で小さく笑つて、また唇を重ねあつた。

一度と、恋愛なんてしないと思つていた。

男はみんな同じ。女の子を都合のいいよひしか扱わないと思つていた。

でも、やうじやないひともいる。

三上君のおかげで、当たり前のじとじよりやく返づいた。

これから先、ふたりの仲がどうなるかはわからないけれど、今は  
ずっと  
彼のそばにいたい。

私は今、心からうつ想つている。

「恋愛事情～梓の場合～」、ようやく完結いたしました。

ここまで書き続けてこられたのは、『恋愛』読いただいた方はもちろんのこと、興味を持ってアクセスしていただいた方、そして書く場を下さったウメ研究所さまのおかげだと思っています。

本当にありがとうございました。厳しくも温かい『意見』、お待ちしております。

次回作は歴史物になる予定ですが、引き続いひっこを頂ければうれしく思います。

それでは、またお会いできる日まで。

ありがとうございました。

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。  
(月1回)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5271a/>

---

恋愛事情～梓の場合～

2010年10月10日19時24分発行